東北教区報　2025年2月号

あけぼの

発行所
日本聖公会 東北教区
仙台市青葉区国分町2-13-15
TEL 022-223-2349
FAX 022-223-2387
URL https://nskk-tohoku.com/

シリーズ「東北の信徒への手紙」

シメオンとアンナ

主教　ヨハネ　加藤　博道

幼子の誕生から四十日目、若い両親は赤ん坊イエスを連れて、エルサレムの神殿へとやってきました。誕生四十日目のいわば宮参りです。神殿といっても厳粛というよりは、いろいろな用件で各地から来た人々でごったがえしていたのではないかと想像します。その時、一人の老人が両親と幼子のもとへ近づいてきます。「主が遣わすメシアを見るまでは死ぬことはない、とのお告げを聖霊から受けていた」老人シメオンです。彼は両親の手から幼子イエスを抱き取ると「私はこの目であなたの救いを見た。これは万民の前に備えられた救い、異邦人を照らす啓示の光」と神を賛美します（「シメオンの賛歌」）。それからマリアに向かって大変なことを言います。「この子は、イスラエルの多くの人を倒したり立ち上がらせたりするためにと定められ、また反対を受けるしるしとして定められています。剣があなたの魂さえも刺し貫くでしょう。多くの人の心の思いが現れるためです」。とんでもないお爺さんです。しかしすごい預言です。キリストの生涯の出来事と意味を鋭く言い切っています。シメオンはまだほんの小さく無力に見える幼子のうちに神の救いの業の始まりを見抜くのです。そこにまたアンナという女預言者が登場します。夫と死別して84歳になっていました。そして「神殿を離れず、昼も夜も断食と祈りをもって神に仕えていた」女性でした。彼女も近づいてきて神に感謝を献げ、人々に幼子のことを伝えます。預言者であり宣教者です。女預言者は旧約聖書にも見られます。出エジプトの後、アロンの姉ミリアムが女たちと共にタンバリンを手に踊りながら歌う賛歌が『出エジプト記』第15章にあります。「主に向かって歌え。主は馬と乗り手を海に投げ込まれた」（「ミリアムの歌」）。パワフルです。

降誕日から四十日目、「被献日」（2月2日）の出来事です。今年は2月2日が主日なので、教会全体でこの福音書（『ルカによる福音書』第2章）を読むことになります。幼子イエス、若い両親、そして相当高齢なシメオンとアンナ。世代を超えた出会いの場面です。

教会の高齢化を憂える声がときどき聞かれます。しかしシメオンとアンナの高齢者パワーはそんなことを吹き飛ばします。私たちの教会にもたくさんのシメオンとアンナがおられます。豊かな経験を持ち、信仰の熱い情熱を保ち続けてきた方々です。実際、身体的にも精神的にも昔とは十年二十年違うでしょう。今ある教会のエネルギーを十分に生かしたらよいのだと思います。もちろん、若者も中年も負けずに。

聖霊降臨日、ペトロはヨエル書を引いて語ります。「あなたがたの息子や娘は預言し、若者は幻を見、老人は夢を見る」（『使徒言行録』第2章）。「老人は夢を見る」。ヴィジョンを持ち、夢を語るのです。

教会という共同体の特徴、強みは他の社会（学校や職場）以上に、赤ん坊から老人まで世代を超えた出会いと交わりがあることです。また現在の生活の状況や事情も人それぞれ異なるでしょう。それでも信仰によって結びついた共同体は、やはり不思議な、そして豊かな存在です。その豊かさを生かしつつ、喜びをもって歩む教会の、この一年でありますようにと祈ります。

（元東北教区主教）

東北教区宣教協議会

2024年11月４日

教区報前号でも短く報告させていただきましたが、昨年11月４日に仙台基督教会で開催された東北教区宣教協議会に関して、今号では「２０２３年日本聖公会宣教協議会からの呼びかけ」の３つの呼びかけについてそれぞれ協議会当日にどのような発題であったのか報告させていただきます。

ここからまた歩きはじめよう

～いのちに仕え、となりびととなるために～

わたし（自分）はどんな時も聖霊によって「今」いる場所に派遣されています。ですからそこが常に原点でありスタートです。自分が置かれた場所を見つめ、そこから歩き始めましょう。「となりびと」とはどこかの抽象的な何かというのではなく、まずは「わたし」が置かれた場所で出会う人・物・出来事のことです。そして、となりびととなるとは、対象となる誰かの存在があり、それが教会、地域、神さまが創られた世界の声に耳を傾け仕えていくことが呼びかけられています。

（司祭　越山　哲也）

1、「神のみ声に耳を傾けよう」

呼びかけの第一の項目は『神のみ声に耳を傾けよう』です。生前のイエス様から直接言葉を投げかけられることのできないわたしたちは、まず聖書から「聴く」ことになります。祈りで神様とつながり、み言葉からわたしたちの生き方を学び、礼拝を通して吸収する。信徒同士で語り合うときに新たな気づきを得ることもあります。そのような機会をたくさん作り、心を開いて聴き合いましょう。また、神様に見守られ愛されている存在であることを子どもたちに伝えるため、子どもたちと共に祈り、子どもたちへみ言葉を届けましょう。

①イエスの弟子となる

私たちはみな、神様に召し出されています。イエス様に出会い、弟子としてイエス様に倣い歩んでいます。わたしたち一人ひとりに与えられた賜物は、イエス様の体である教会によって一つの大きな賜物となります。私たちに与えられた賜物は何なのかを、今一度確認してみませんか？

②進むべき道を問い続ける

キリスト教を信じるわたしたちにとって、進むべき道の指針となるのは聖書です。日々の生活の中で聖書を読む時間を持ちましょう。また、教会で朗読の集まりを持つなどして互いに語り合うことで、新たな気づきを得ることもあります。聖書を読み、神様のみ心を祈り求めましょう。

③変化を恐れない

聖書、祈祷書の言葉はそれが作成されたときの言葉、感じ方、価値観等の様々な背景を持っていることを理解し、常に今のわたし、わたしたち、世界においてイエス様が何を伝えているのかという本質を求める不断の努力が大切です。そして必要であれば変化を受け入れていくことも重要です。特にわたしたちは、２０２８年に北海道教区と一つになることを目指しています。北海道教区との宣教協働という変化を伴う大きな恵みについて、私たち自身、教会、教区の未来について互いに語り合い、希望を持って進んでいきましょう。

（若生　伸子）

2、「人々の声に耳を傾けよう」

呼びかけの第二の項目は「人びと」に目が向けられています。「祈り・み言葉・礼拝」を通して宣教の器としての自覚を持つ私たちの信仰は「わたし」と神との関係だけではなく、神様からの愛と恵みを分かち合う「となりびと」の存在が大切であることをイエスさまが教えてくださいました。「人々の声に耳を傾ける」その実践の場が教会、幼稚園・こども園、地域です。ではどう実践したらよいのでしょうか。

①セーフチャーチにしよう

教会がありのままの「あなた」を受け入れ、地域や社会とのつながりを持ち、すべての人が守られ、安心できる場所になること、そして居場所が必要な人がたどりつくことができる場所になることです。教会の安全安心はそこにいる人の意識によって作られます。「安心な雰囲気をつくる」を意識して人とつながることが「セーフチャーチ」に一歩近づくのではないでしょうか。

②小さな声を大切にしよう

「多様性」という言葉をよく耳にしますが、多様性はどちらかといえば違いを強調している言葉です。私たちが大切にしたいのは「多彩性」です。多彩性にはそれぞれが持っている個性を大事にするという意味合いがあります。

多彩性を大切にする時、もしかすると場のルールが崩れてしまうことがあるかもしれません。ですがそれが「小さな声を聴く」ことになるのならば、この場で共に生きるために立ち止まり「あなた」の声に耳を傾けることは必要なことなのです。

③地域の必要に応える

教会も幼稚園・こども園もこの場に遣わされた地域の一員であることを自覚し、そこでの課題に関心を持ち、自分事として取り組むこと、教会が幼稚園・こども園の子どもたち、保護者にとって安心できる居場所になるよう協力し合って礼拝や行事を行うことなど「共に」「互いに」「し合う」関係性を作り、これから一緒に出来ることを考えてみてはどうでしょうか。

（中村　久美子）

3、「世界の声に耳を傾けよう」

呼びかけの第三の項目は、神様が創られた自然・世界・社会といった「世界の声に耳を傾けよう」です。三番目の項目は神と人々の声に耳を傾け響き合いながら、この世に存在するすべての被造物の声を聴きましょうという意図が込められています。

①地球のいのちに仕える

「地球のいのち」には自然のすべてが関わります。東日本大震災を私たちは経験しました。その時に発生してしまった東京電力第一原子力発電所の事故によって漏れ出した放射能によって受けた大きな傷は、私たち人間のみならず自然を傷つけてしまいました。これは私たち人間の責任です。

地球温暖化によって毎年のように続く大雨による大規模災害、反対に深刻な雨不足による被害が各地で起きています。能登半島での豪雨も地球温暖化が起因する部分はあるのではないかと思います。また、世界各地で続く戦争紛争によって多くの人の命が犠牲となっています。それらのことに思いを馳せ、祈り、自分たちに出来ることをしていきましょう。

②平和をつくりだそう

イエス様は「平和を造る人々は幸いである。」と教えられました。主の平和とはあらゆる命が大切にされ、人々が安心して暮らせる世界を実現することです。そのために私たちは祈り、無関心であることを避けて声を聴き続けていきましょう。

ややもすれば、氾濫する情報に麻痺し、また祈り続けることに無力感を覚え、目を背けてしまうことがないようにと呼びかけられています。

③世界のうめきや叫びに向き合おう

聖公会は世界に広がっています。私たちの東北教区と友好協力関係にあるテジョン教区では、水道事情改善のために支援を続けてきたタンザニア聖公会タンガ教区と協働関係を締結しました。また、昨年6月には教区婦人会の研修で、同じくタンザニアで長い間ＪＯＣＳ（日本キリスト海外医療協力会）のワーカーとして働かれた助産師で北海道教区信徒の雨宮春子さんのお話を聴く会がありました。

このような活動を今後東北教区で行っていけたら良いのではないでしょうか。

（司祭　越山　哲也）

以上、３つの呼びかけについての発題内容について短く紹介させていただきました。

今回の東北教区宣教協議会では３つの発題ごとに参加者同士が小グループで分かち合う時間を持ちました。この時間が参加された皆さんにとって、とても良い時となったようです。参加者からの声をいくつか紹介します。

「分かち合いは環境の似ている先生方と、悩み、苦しみ、その時の神さまの言葉、仲間と共に乗り越えた時の感謝……たくさんの話が出来て、実りある時間でした。」

「とても豊かな時間でした。まだまだ話し足りないくらいでした。新たな視点が与えられ、世界が広がったように思います。」

「話し合いの場が保証されていて、話しやすく楽しく参加することが出来ました。」

「同じ目的を持つ私たちが、皆で分かち合いながら進んでいくという気持ちを持てたことが一番でした。」

２０２３年日本聖公会宣教協議会からの「呼びかけ」は、私たち一人ひとりにも呼びかけられています。各人がこの「呼びかけ」を自分事として捉え、自分もとなりびとも共に安心してみ恵みに感謝し、いのちを大切にして歩む。この「呼びかけ」をそのための指針にしていきましょう。そして、今後どのようにこの呼びかけに応えていくか、今後も引き続き東北教区宣教協議会準備委員会でもう少し話し合いを続けながら、皆さんと私たちの「これから」を考えていきたいと願っています。

（東北教区宣教協議会準備委員会リーダー　司祭　越山　哲也）

各教区人権担当者会に参加して

宣教主事　ヨハネ　村上　道夫

２０２４年12月12日・13日に東京の国立ハンセン病資料館と多磨全生園での研修を中心に「各教区人権担当者会」が開催されました。一日目は資料館の見学に続いて、各教区の取り組みや課題を共有するセッションがありました。教区毎、あるいは教区内であっても地域によって人権意識の持ち方に格差があることなどが課題として挙げられました。

二日目は全生園内の見学と入所者の方の証言を聴きました。子どものころにハンセン病を発症し、カトリック教会が運営する私立の療養所へ入所したそうです。そこではシスターや神父から家庭では味わえなかった愛情を受けて育てられ、治療が行われ、成人後には退所して同じ病を持っていた方と結婚し子どもも授かりました。退所後の就職先や住居についてもカトリック信者からの支援を受けられたとのことで、感謝の気持ちを述べられていました。となりびとに寄り添うという教会の一つのはたらきを垣間見た思いです。その後、連れ合いの方の病が再発し亡くなり、葬儀を通し両親がハンセン病であることが娘さんの配偶者のご家族に知られ、娘さんは離婚させられました。やはり、らい予防法が廃止されてからも偏見・差別は無くなってないということも改めて教えられました。

午後は、松丘聖ミカエル教会の信徒であった藤崎陸安氏の奥様が、陸安氏の遺志を継いでハンセン病問題の啓発活動として作製された「私の生命の物語」という紙芝居によって、療養所では結婚は許されているものの、子どもを産むことは許されず、胎内に宿った命は堕胎され、生きる権利を国によって奪われていたことが伝えられました。

個々の課題に寄り添いつつ、命の尊厳を守ることについては強く声を上げ続けることがキリスト者の責務であることを学びました。

常置委員会報告（第２回・11月25日）

報告事項

▼常置委員長報告：第１０９（定期）教区会に常置委員会から提出した報告および議案の全てが承認・可決された。

協議事項

▼２０２５年度信徒奉事者（分餐奉仕協力許可）推挙について：常置委員会開催日程の都合から12月中にメール稟議で対応することを確認。▼「教区事務所職員給与規程」「教区事務所職員就業規則」の規則改正について：これを承認。▼第１０９（定期）教区会期の教区諸委員選任について

総　主　事：八木正言司祭
総務主事：浅原和裕氏
教育主事：中村久美子氏
宣教主事：村上道夫氏
財政主事：赤坂有司氏

の留任を承認。その他各グループ・部門長及びメンバーについても、各主事からの推挙を基に検討し年度末までに委嘱する。▼盛岡聖公会釜石神愛伝道所設立申請について教区主教より諮問があり、適当である旨を答申した。

東日本大震災被災者支援プロジェクト報告

12月18日の水曜喫茶は５名の参加でした。この日は年末のためか参加者は少なめでしたが、小生が原発問題プロジェクト・ホームページに連載中の「ボヤキ」を枕に、皆で大いにぼやき合い、憂さを晴らしました。

来る３月11日は東日本大震災から14周年を迎えることになります。今年も東北教区内諸教会を会場に、祈りと黙祷を献げます。また、今回は仙台基督教会を会場に、東京聖テモテ教会信徒の島田明夫さんをお迎えし、講演会を行います。島田さんは日本の災害と防災について研究を重ねてきておられる方です。仙台基督教会会場での記念の祈り、講演会はＹｏｕＴｕｂｅで配信いたします。皆様どうぞ最寄りの会場教会にて、またそれぞれの場で、ご参加、ご視聴いただき、被災地と震災被災者、原発事故被害者の方々を覚えてお祈りください。

（リーダー　浅原　和裕）

「東日本大震災14周年記念の祈り」と「講演会」のご案内

2025年３月11日（火）

14：15～15：00　記念の祈り
場所：東北教区内会場教会

15：10～17：00　講演会
場所：仙台基督教会（ライブ配信）

「まずは防災」備えてから祈れ

講演：島田明夫 氏
（東京聖テモテ教会信徒、東北大学名誉教授、東北大学災害科学国際研究所 特任教授、内閣府火山防災エキスパート）

（主催：日本聖公会東北教区東日本大震災被災者支援プロジェクト）

「せみなりお青葉シリーズ4」発刊にあたって

奉仕職養成グループ前リーダー　ソフィア　赤坂　康子

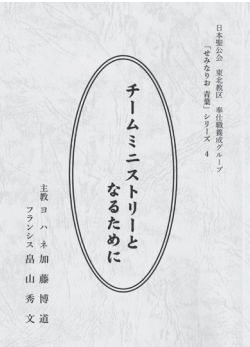
『今の東北教区には働き手がどうしても足りません。（中略）教会の在り方、聖職・信徒の意味と働き方について、考え直していくことは今の時代を生きる私たちに与えられた「チャレンジングな課題」だと思えます。（中略）新しい働き方のモデルを創る、そういう必要に今向き合っているのだと思います』

この度発刊されました「せみなりお青葉シリーズ4」（チームミニストリーとなるために）からの引用です。チームミニストリーが話題となっている今、まさに待ち望んでいたものが、タイムリーな出版となりました。

昨年の4月に加藤博道主教に執筆をお願いし、弘前昇天教会の畠山秀文さんにも信徒からとして文章を書いていただきました。校正の際は長谷川清純主教、村上道夫宣教主事、教区事務所にもご協力をいただきました。この冊子の完成は、出版に携わることが出来ました奉仕職養成グループ委員にとっても感謝であり喜びでした。

加藤主教にはチームミニストリーとは何か、それを実践するためにどうしていったらよいのか、ただ上からの誰かの指示を待つだけではなく、自分の意識を前向きに、さらに一歩を踏み出すためにはどうしたらよいのか等、実際的な示唆をいただきました。また畠山さんは野球の例を挙げ、チームワークの素晴らしさを熱く語ってくださっています。是非、手に取ってお読みください。

3月30日（日）の午後1時、奉仕職養成グループではこの冊子をもとに「チームミニストリーとなるために」の研修会を開催いたします。皆さまご参加ください。



北海道教区　教会紹介

釧路聖パウロ教会

釧路市の古い港を望む高台に建てられた教会です。1886年の伝道開始から139年の歴史があり、現在の教会は3代目の建物です。毎週10～15名で礼拝を守っています。教会の隣には頌栄保育園があり、園児たちの声が響いています。歴史的に「教育」に力を入れていた教会であり、宣教開始間もなく「英和女学校」を開設、アイヌの方々への教育のため「春採（はるとり）アイヌ学校」ほか頓化（とんけし）、塘路（とうろ）、白糠（しらぬか）にもアイヌ学校を建てています（今はどれも残っていません）。また、釧路で育った八代斌助主教の記念室が教会内に設置されています。

主教コラム　きのうも今日も、また

昨年11月17日、仙台聖フランシス教会での主日聖餐式で「誕生感謝の祈り」を執り行いました。仙台市にお住いの札幌聖ミカエル教会信徒ご夫妻に、10月初めての赤ちゃんが誕生しました。札幌から父親のご両親も駆けつけ家族揃って感謝を献げられました。式の間赤ちゃんの元気よい泣き声が聖堂内狭しと響き渡って、会衆は清々しく幸せな気持ちに包まれました。神様からの賜物の大きさを想い、赤子の成長と家庭の平安のため、また3人の親子に豊かな祝福をお祈りいたしました。

12月、青森聖アンデレ教会と弘前昇天教会の2教会と、聖マリア幼稚園、聖アルバン幼稚園、聖ヤコブ幼稚園そして明星幼稚園の4園で礼拝とクリスマス会を持ちました。少々あった疲労よりもお恵みのラッシュで神的な栄養をたっぷり頂いて心は健康です。降誕日、弘前での聖餐式に自分の教会で礼拝ができなかった青森の信徒たちが勢い立ってレンタカーに乗り、11名が出席してさながら合同礼拝でした。祝会は昇天教会の皆さんが豪勢なオードブルを用意されて歓談に花が咲き、予期せぬ温かな信徒の交わりが展開されて感謝な一日でした。

今冬の青森は50年で3度目の記録的な大雪で、12月に積雪1m超えは滅多にない現象です。私が青森聖アンデレ教会に異動した2020年の冬がその1回で、赴任1年目に豪雪の大歓迎を受け、雪国の洗礼を受けたのを思い出しました。北の国では当たり前のことで特別驚くものではないですが、除排雪や寒さを忍耐し暮らすのは大変です。そういう環境に慣れ親しみ、何かで楽しまなければやはり辛いだけになってしまいます。

暗くホワイトな午後に園児さんたちが演じる聖劇は、神様の愛のぬくもりとキリストの光を強烈に感じさせるものでした。子どもたち、保護者さんたちと先生方に神様の祝福がいっぱいありますようにお祈りいたしました。

（教区主教）

北から南から

能代キリスト教会

昨年12月15日、宣教開始百十年周年記念事業として、楽器コカリナと電子オルガンによるコンサートを開催した。

第１部は10人のメンバーによる秋田杉で造った木の笛やハンドベルでクリスマス曲を演奏。第２部は、市内にお住まいのパイプオルガン奏者の久保田朋子氏が、教会に寄贈されている電子オルガンでバッハの教会音楽を弾いてくれた。フィナーレは「星の世界」という曲を観客の歌と合奏した。演奏者を含め、30名の参加となった。

終了後は、今回近隣教会から参加くださった大館の信徒さんたちを含め、教会と地域の方々とのお茶とお菓子での交流会も行われた。

降誕日礼拝は信徒にコロナ感染者が出、やむなく司祭様一人だけの礼拝となった。

公　　示

救主降生2024年12月31日
日本聖公会東北教区主教
主教　フランシス 長谷川　清純　㊞

下記の人事異動を発令します。

司祭　ステパノ 越山哲也
2024年12月31日付　釜石神愛教会管理牧師の任を解く。

以上

救主降生2025年１月１日
日本聖公会東北教区主教
主教　フランシス 長谷川　清純　㊞

1．第109(定期)教区会の決議により、2025年１月１日付で、日本聖公会東北教区盛岡聖公会と日本聖公会東北教区釜石神愛教会を合併し、新教会名を日本聖公会東北教区盛岡聖公会とする。
2．第109(定期)教区会の決議により、2025年１月１日付で、日本聖公会東北教区盛岡聖公会の伝道所として、日本聖公会東北教区盛岡聖公会釜石神愛伝道所の設立を認可する。

以上

山形聖ペテロ教会

昨年４月より八木正言司祭様が管理牧師になられ、第３・第５日曜日の聖餐式、６月からは第１日曜日は加藤博道主教様による聖餐式、第２・第４日曜日はみ言葉の礼拝を行っております。

昨年は教会の建物が登録有形文化財になっていることもあり、山形市のイベントでツアーを組んで見学に訪れる方や、買い物帰りに「見学していいですか」と訪ねられることもありました。皆さん礼拝堂の厳かな雰囲気に感嘆されていきます。中には幼稚園の卒園生の方もおり、なつかしいお話も聞くことができました。教会に興味を持ってくれる人が増えることに期待です。

12月のクリスマスイブ礼拝、翌日のクリスマス礼拝はとても充実した２日間でした。泊まりがけで来県くださった八木司祭様に感謝申し上げます。また、昨年暑い夏の間も山形においでくださった加藤主教様にも感謝申し上げます。今年の夏も「水ようかん」楽しみにしていてください。

小名浜聖テモテ教会

朝晩と日中の寒暖差がより一層大きくなり、冬の訪れとともに待ち遠しかったクリスマスの季節になりました。

２０２４年は例年より少し早めのクリスマス聖餐式とイブ礼拝が林司祭により執り行われ、ふだんはなかなか礼拝に来られない若い方々や、幼稚園の先生方とご一緒することができて、近況報告などをわかちあい、嬉しい一時となりました。また、イブ礼拝には初めて来訪された方もおられ、赤ちゃんも一緒だったのですが、元気な泣き声が聖堂中に響き渡り、久しぶりに賑やかな、でも微笑ましいその姿は、まるで赤ちゃんイエスさまのようだねとみんなで話しながら、心あたたまる素敵な楽しいクリスマスの一時となり、心から感謝でした。

私たちの教会は、仕事で多忙な方やご高齢の方がおられ、なかなか礼拝に出席できる人数が限られておりますが、これからもみんなで心を合わせて、協力しながら、礼拝を守っていきたいと思います。

２月16日は「ハンセン病問題啓発の日」です。ハンセン病問題により苦しめられた方々を覚え、理解が深まるようお祈りください。

永遠の平安

セシリヤ　増田　由紀子
（11月７日・盛岡）
クリストファー　増田　友之
（12月11日・盛岡）

２月逝去者記念聖餐式

２月５日(水)　午前10時～
於　主教座聖堂
司式・説教　八木　正言 司祭

伝道師　横田　秋生
１９２３年２月４日逝去
宣教師　Miss Berta R. Babcock
１９４３年２月４日逝去
執事　戸所　芳一
１９７１年２月７日逝去
主教　ダビデ 谷　昌二
２０２２年２月９日逝去
主教　Norman Spencer Binsted
１９６１年２月20日逝去
伝道師　桑野　文子
１９４１年２月22日逝去
主教　Shirley Hall Nichols
１９６４年２月25日逝去